

# 北路歷程

宮島悦夫

目指すは天空を駆け巡る粉末の流星群ノ隠者・盲魚が地底より這い出で天変地異に動揺する太古の斜塔が水晶宮の天蓋を貫通して北を粉碎する黎明、羅針盤に導かれた帆船は胎内を彷徨い刻々と変わる北に向って回転運動を始める。円が持つ方角の凡を数え挙げ、更に回転に楽器の曲線と和声の法則を与えれば純白の瀑布の下に雲の音と形を供えた聖ソロモンの祈禱に乗り帆船は軽々と蒼穹に舞い上がる。羽衣或は外套の絶頂に立ち弾力に富む花芯の時が風葬礼の鐘を満腔に響かせる——足りないのは風。構寸や額の微熱を集め銀の空気枕に詰め込み帆樫の上の水平線を眼下に眺める位置に避雷針を打ち立てる。「羅針盤は廻っているか」意識圏に膨る呪縛の鏗を解き放ち雷鳴轟く天空に漂よう帆船に、爆発する空気枕は極彩色の風を賣すだろう。「北へ 玲瓏たる北へ進め」一角獣を追う狩人が巡った空よりも速く踊り子の踵よりも硬い北の流星群を目指して長い縞の奇声の中を回転せよノ風葬の香煙が地を這い海に潜って朔風を避けば、凍てついた湖水の果ての氷柱は透明な寶石となつて粉末の北を固定する。森通と自慰に疲れた魔窟の性器の皺の数さえ大伽藍の頂点に向って萎え、夢見る塔の老処女は林檎や柘榴の木霊を懐胎している。スカートのように妖艶な風を孕んだ帆は狂い咲きの薔薇の怒濤も恐れぬ盲目の案山子が操る死の花籠（乗組員はヨブの子供達）ならば満月の宿怨に裂けた海の胎内に血のように疾走した薔薇や芙蓉の花汁が降り注ぐ無風の夜もあるだろう。へわたしの生れた日は波びうせよV言語

層に立ち籠めた積乱雲の遙か上空をすでに祈禱いのりよりも高く帆船は鋭角的に回転運動を続ける。甲板の上では大仰な祭壇と白い形代かたしろが設けられ化粧を凝らした産婆たちが儀式の準備に忙しい——北の儀式。しかし玲瓏たる北は鏡のように儀式を拒んでいる。瀑布ばくふの下の祈禱の水煙じゆせに呪詛のろの水脈みおを曳いたオリブの枝を垂らす儀式は氷柱の光の幻姿げんしを見ることもなく、悉く焰こくとの鱗うかの餌食となるだろう——そこでは透明なゴルゴダの雲みぞれだけが犠牲いけにえとして供えられているのだから。「船は北へ向って進んでいるか」大伽藍だいがらんより雪崩なだれうつ黄昏たそがれの彼方に季節の脳髓を包み桎梏の正午を包み両極に引き裂かれた天体を包み込んだ北がある。だから虚空こくうの中に甦った結晶が死児の葬列を水底の揺籠ゆりかごへと導くと、髪を凍らせ皮膚を凍らせ帆船は水晶となり椅子のように北に坐るのだ。「帆を揚げよ／オリオンより高く」凡すべての方角を幾何学な光線で結ぶ怨念おんねんの連鎖を断ち、北へ向って回転する激しい点は花卉を散らし産婆さんばの儀式を欺き祈禱いのりの冠を饒いたけば、蒼穹を羅針盤の頂点まで駆け登りバベルを超えて見降す天空の一隅に聖者の青ざめた血管／蛮刀きつさきの鋒から逃れメフィストの呪文じゆもんに餌もりを投げると舳先へさきより迸る鮮血さえも風となり美しく装った花籠はなかごは今や北に坐る死の帆船（乗組員はヨブの子供達）！